

平成25年度 学校経営計画書及び学校評価計画書

石川県立飯田高等学校

学校長 井下 守

1 教育目標

真理を探究し、高い知性と豊かな心を養い、積極・進取の精神をもった明朗快活で実践力のある誠実な人間を育成する。

2 中長期的目標

(1) 学校の現状

- ① 昨年度、創立百周年を迎えた本校は文武両道を校是として継続し、教育目標に掲げる人材の育成を目指し101年目の歩を進めている。
- ② 過疎化・少子化の進展により、生徒が一層多様化している。生徒の多様な生活意識や能力に応じた学習指導と進路指導が求められている。
- ③ 普通科と総合学科併置の特性を踏まえ、生徒の多様な進路希望に応える指導・支援体制の構築が求められている。
- ④ 生徒の一段高い規範意識の醸成を目指し、ボランティア活動や地域行事への積極参加を通じて、地域に密着した学校作りを推進している。
- ⑤ 文部科学省の指定事業を通じて、地元の中学校と連携を取り、中高接続を意識した英語の学習指導の在り方について研究を進めている。

(2) 生徒に関する中長期的目標

- ① 学びに対する意欲と身構えを自ら整え、キャリア・アップを図り、自分の将来に対して志の持てる基盤を築く。
- ② 基礎・基本となる知識や技能の習得を基礎として、自らの未来を拓く素地となる思考力・判断力・表現力を身に付ける。
- ③ 礼儀正しく、互いの個性や能力を尊重し合い、故郷に誇りと愛着を持ち、国際的視野に立って社会に貢献できる人材を育成する。

(3) 教職員、学校組織等の望ましい在り方

- ① 教職員の経営参画意識を高め、課、学年、教科間の連携を図り、組織体としての教育力の向上を図る。
- ② 教員が学校経営の視点を持って業務を進め、主任層が積極的に指導・助言や提案を行う。
- ③ 学習指導、部活動や学校行事等において生徒と強く係わりとともに、生徒の支援者として自らの総合的指導力を高める。
- ④ 学校公開や外部に対し適切な情報提供を積極的に行い、地域の特性を活用した取組を進める。

3 今年度の重点目標

(1) 生徒の多様な進路希望に応える学力養成

- ① 学習指導はじめ様々な取組に対する教員の結果分析力・課題把握力・改善策立案力を高める。
- ② 「学校間連携による教育力向上事業」の取組継続により教員の教科指導力を強化し、生徒の進路意識の高揚と学力向上を図る。
- ③ 大学入試問題解法研究と成果発表を継続し、実践的教科指導力の強化を図る。
- ④ 先進校視察により学習指導と進路指導に関する方法や体制の更新を図る。
- ⑤ 「英語力を強化する指導改善の取組事業」の継続により、英語によるコミュニケーション力を高める。
- ⑥ 学習時間調査を継続し、家庭学習や生活実態の的確な把握と情報共有により個に応じた学習支援を徹底する。

(2) 生徒の生活意識・習慣を踏まえた規範意識の育成

- ① 的確で迅速な生徒の動向把握と対応により安全・安心な学校生活づくりを支援する。
- ② 「登校坂の挨拶」に加え、日常の挨拶やコミュニケーションを通して、言葉による自己表現力を高める。
- ③ 部活動全員加入を奨励し、「遅刻ゼロの日120日」の取組を継続する。

(3) 普通科、総合学科の特長を生かした教育活動の推進と生徒の更なるキャリア・アップ

- ① 座学や実習の授業による基本的な知識・技能の習得を基礎として、生徒の論理的、創造的思考力、判断力、表現力の育成に取り組む。
- ② キャリア教育講演会、国際理解教育講演会やペアレントティーチャーによる講座を通して自立した社会人に必要な素養を身に付ける。

(4) 地域に密着した、地域から信頼される学校づくりの推進

- ① 教育活動や学校行事に関する情報発信を積極的に進め、本校に対する地域理解をより深める。
- ② 除雪ボランティアの継続、地域の公民館はじめ市の関係機関と連携し、地域のニーズに応えるボランティア活動を進める。

平成25年度 石川県立飯田高等学校学校評価計画書（最終評価）

重点目標	具体的取組	実現状況の達成判断基準	集約結果	最終評価	成果と次年度の改善策
1 生徒の多様な進路希望に応える学力養成	① 教育力向上事業によって教科指導力を強化し、生徒の進路意識の高揚と学力向上を図る。	各学年で設定した目標 1年、偏差値56以上30名、60以上10名 2年、偏差値56以上40名、60以上20名 3年、偏差値56以上30名、60以上8名 を1月までに達成した教科数が A:3教科 B:2教科 C:1教科 D:0教科	1年(7月→1月) 英語:56以上7→15、60以上3→7 数学:56以上19→24、60以上13→12 国語:56以上20→29、60以上10→14 2年(7月→1月) 英語:56以上18→25、60以上13→12 数学:56以上24→18、60以上9→6 国語:56以上46→49、60以上26→28 3年(7月→10月) 英語:56以上5→6、60以上3→2 数学:56以上11→4、60以上5→3 国語:56以上32→20、60以上22→11	D	上位者に対して教材を工夫した授業を行ったり、添削指導を行ったりし、学力を向上させ、また、中下位層に対しても授業に於いて適切な負荷をかけて56を目指した結果、これまでの2、3年国語に加えて、1年国語や2年英語でも学力向上の兆しが出てきた。来年度に向けては、数学(全学年)の指導に重点を置いて指導し、バランスのよい学力を形成していく。
	② 難関大学入試問題の解法研究と成果発表を指導改善に活かす。	金沢大学レベル以上の大学合格数が A:16名以上 B:13名以上 C:10名以上 D:10名未満	金沢大学レベル以上の現役の合格数が10名であった。	C	年度当初に予想された人数より出願者数は増えており、取組の効果が現れている。次年度以降も英数国の習熟度別学習指導、理科・地理歴史科・公民科にも時間をかけ、得点力をつける指導を継続する。
	③ 自立的な家庭学習の習慣を定着させ、学力向上につなげる。	1、2年の家庭学習時間の目標を達成している生徒の割合が、 A:70%以上 B:60%以上 C:50%以上 D:50%未満 3年の家庭学習時間の目標を達成している生徒の割合が、 A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	最近の調査において、平日で目標を達成している生徒の割合が、1年47%、2年30%、3年42%であった。	D	クラスの平均学習時間は10月よりも確実に増えているが、学年+1時間のスタンダードを越える生徒数が減少した。家庭学習時間の2極化が進んでいる。家庭学習時間が1時間未満の生徒には課題提出を確実なものにするよう指導を強化する。
	④ 各教科で教科指導研究会や互見授業を実施し、教科指導力を強化する。	授業評価アンケートにおける英数国予習実施率/それ以外の教科の興味関心高まり率が A 85%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満 (判断基準の一部修正)	予習実施率は英語87%、数学80%、国語76%であった。それ以外の教科の興味関心高まり率は、7教科すべてで80%を超え、平均87%であった。	A	教科指導力強化の取組成果が実際の授業に反映された。今後も外部テスト等の結果との相関を比較検証し、結果の伴わない教科の授業改善に引き続き取り組む。
	⑤ 文部科学省の指定事業の推進により、普通科の生徒の英語コミュニケーション力の向上を図る。	7月から12月にかけて、グレードを上げた生徒が、 A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	各学年でグレードを上げた生徒の割合 1年生: 105人中39人(37%) 2年生: 118人中54人(46%) 合計 223人中93人(42%)	C	全国的に1年間で約30点の伸びが見込まれるこのテストにおいて本校は各学年とも半年で約30点伸びた。グレードを上げた生徒の目標値は達成することができなかったが、一定の成果を得ることができ、来年度も半年で30点の伸びを最低目標に指導していく。
学校関係者評価委員の評価	成績上位者から下位者まで幅広い生徒がいることは、子どもの人間形成上は好ましいことだ。ただ、様々な学力レベルの生徒を教えなければならない先生方の負担は大変なものであり、よくやっている。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	成績上位者指導、成績下位者指導ともに、個々に応じたきめ細やかな指導を実践し、生徒たちの進路実現を図るべく、教職員一丸となって支援していく。				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
2 生徒の生活意識・習慣を踏まえた規範意識の育成	① 毎日の清掃活動とおして全校生徒が全職員と共に、積極的に環境美化に努める。	生徒の自己評価アンケート(班ごと)から清掃がきちんとできた割合が A 85%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	各クラスの自己評価の平均が85%を超えたクラスが13クラス中7クラスあり、学校全体の平均が86.9%となった。	A	校舎全区域の清掃活動や整理整頓の状況を点検することにより、生徒の環境美化に対する意識が向上してきた。来年度は評価項目を見直し、さらに学習環境にふさわしい校内美化の促進に努めたい。
	② コミュニケーションの基本として、さまざまな生活場面に応じた挨拶や対応ができる能力を身につけさせる。	生徒の自己評価アンケートから挨拶が日常化できた割合が A 85%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	アンケート調査の結果、良くできた、大体できたの割合が91.0%。1年生(89.9%)、2年生(88.5%)、3年生(94.3%)であった。	A	生徒会や生活委員、又は野球部員による朝の挨拶運動を実施することにより、挨拶への意識付けは高まった。ただ、声が小さいなどの消極的な面も見受けられるので、元気よく積極的な挨拶ができる指導が必要である。
	③ 生活時間を自律的に管理できることを目指し、「遅刻0の日」運動を継続する。	「遅刻0の日」が年間合計で A 120日以上 B 100日以上 C 75日以上 D 75日未満	年間集計の結果、遅刻0の日は158日であった。	A	この運動も定着しつつあり、生徒に時間を守る意識が向上してきている。授業のベルスタートの徹底もこの数値をあげた原因である。 ただ、遅刻ギリギリに来る生徒もわずかであるが、余裕のある時間設定を指導する必要がある。
	④ 体育授業での集合・整列・準備体操の指導を通じて、服装や挨拶、声だし、迅速な行動など規律ある行動を身につけ授業以外にも普及するように努める。	授業担当者の評価と生徒のアンケート結果がそれぞれ A全クラスでできている できたと答えた生徒が90%以上 B80%以上のクラスでできている できたと答えた生徒が80%以上 C60%以上のクラスでできている できたと答えた生徒が70%以上 D共にCの基準に達していない	生徒アンケート(回答447/465)96% 質問1:授業の始まりと終わりの集合・整列が年間通じてきちんとできたか。 435人(97%) 質問2:服装や挨拶、準備体操の声だしなど規律ある行動が年間通じてきちんとできたか。413人(92%) 質問3:質問2のことが他の授業や授業以外にも波及するよう年間通じて努力したか。402人(90%)	A	生徒の自己評価が全体的に甘い面はあるものの、生徒のアンケート結果から総合してA評価とした。担当者の評価は、体育の授業に関しては全体的に向上していると評価できるが、体育以外にまで波及しているとはいえない。 質問3の行動が必ずしも伴ってはいないが、そうなるよう努めたという生徒が大勢いたことから、今後は行動が伴うような指導をしていく必要がある。
学校関係者評価委員の評価	生徒たちの登校坂での挨拶は素晴らしい。高校での挨拶の習慣が卒業後にもきっと本人の役に立つに違いない。遅刻指導の成果は立派なもの。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	生徒たちは規範意識を身につけさせることを狙い、様々な取組を実践している。挨拶運動や遅刻0運動もその具体的な取組の一つである。ここまでの結果は良好ではあるが、今後、より一層、生徒個々の主体的な取組となるよう支援していきたい。				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
3 普通科、総合学科の特長を生かした教育活動の推進と生徒の更なるキャリア・アップ	③ 工業系生徒が次の資格を1つ以上取得するよう指導する。 ・計算技術検定 ・情報技術検定 ・CAD検定試験 など	各種検定の合格率が A 80%以上 B 70%以上 C 55%以上 D 55%未満 ※(合格者数)/(受験者数)	基礎製図検定の合格率は67% 計算技術の合格率は69% 情報技術検定の合格率は67% 全体の合格率は67.4%。	C	1年、2年の工業系列の生徒が受験したが、数名の生徒には、補習等に積極的に参加させることができなかった。今後は、もっと年間を通した継続的、計画的な補習、指導計画を立て、合格に向けて生徒の意欲を高める指導に努める必要がある。
	④ 工業系の国家試験の合格者を増やす。 ・第2種電気工事士 ・危険物取扱者試験 など	各種検定の合格率が A 40%以上 B 30%以上 C 20%以上 D 20%未満 ※(合格者数)/(受験者数)	第2種電気工事士の合格率は6.3%、 (学科試験科目合格率は12.5%) 危険物乙4類の合格率は5.9% 全体の合格率は6.1%	D	電気工事士に対しては、時間不足から10月受験に変更した。夏季補習、土曜スクール、放課後補習を通して、継続的な指導を行う。危険物には計画的に受験を促し、補習の充実を図る必要がある。
	⑤ 学習意欲喚起のための方策として、各種検定・資格取得を推進する。	学年及び系列の目標とする各種検定資格に対する取得率が A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満 ※(合格者数)/(受験者数)	合格率は全体で52.3%となった。簿記検定(45.1%)、情報処理検定(37.8%)、電卓検定(72.3%)、ワープロ検定(61.7%)、商業経済検定(21.9%)、英語検定(38.5%)の結果である。	C	例年に比べて、上位検定合格者が少なかった。直前の補習対策ではなく、年間を見通した長期の計画にもとづいた指導計画を立てることが必要である。
	⑥ 国際理解を深め、自立した社会人に必要な素養を身に付ける。	生徒へのアンケート調査において、「将来を考える良い機会となった」の回答をした割合が A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	国際理解教育講演会(外務省「高校講座」)やキャリア教育講演会(本校OG大学教授)後に実施した生徒へのアンケート結果では満足度は、ともに90%を超える高い評価であった。	A	当初の狙い通り、生徒たちにとってはとても良い機会となったようである。次年度以降も事前指導を徹底することによって、より効果的な講演会にしていくことが望ましいと考えている。
学校関係者評価委員の評価	様々な進路がある中で、生徒それぞれに個別のご指導を頂くことはとても大変なことだと思う。先生方の尽力には敬服する。生徒たちにとって、この時期の経験(大学受験・資格検定受検等)から得た知識はきっと将来の糧となるはずである。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	普通科・総合学科の併置という環境を生かし、かつその相乗効果を狙った取組を支援しながら、今後とも活力ある学校運営に努めていく。				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成率判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
4 地域に密着した、地域から信頼される学校づくりの推進	① 学校行事の保護者への周知徹底を図り、参画意識に訴える。	会員数425名の内、学校行事への参加者延べ人数が A:80%(340人)以上 B:60%(255人)以上 C:40%(170人)以上 D:40%未満	PTA総会参加者 110名。 PTA研修旅行参加者 8名 飯高祭PTA合唱参加者 30名。 飯高祭バザー他 15名 飯高祭参加保護者 約100名 PTA母親研修会13名 (1/31現在での集計 約276名)	B	A評価には届かなかったが、多くの保護者の方々に学校行事に参加していただいた。飯高祭参加保護者数については概数だが、次年度からは保護者受付を実施し参加保護者数を明確にする必要がある。
	② 地元の小学校高学年・中学校を対象に理科実験授業を学期に1回行う。	実験内容を身の周りの現象と結び付けて理解できたと回答する児童・生徒の割合が、 A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	7月3日(水)、能登町立柳田中学校1,3年生を対象に実施した結果、回答した生徒の100%が実験内容を身の周りの現象と結び付けて理解できていたと回答した。 2月27日(木)、飯田小学校5,6年生を対象に実施した結果、上記と同様の結果が得られた。	A	実施した小・中学校で、非常に高い評価を頂いた。アンケートの自由回答欄でも「理科っておもしろい」等の意見がほとんどであり、理科に対する興味関心の喚起できたと考えている。安全で楽しい実験を目指し、さらなる改善を図りながら、取り組みを継続させていきたい。
	③ 地域のニーズに応えるボランティア活動として除雪ボランティアを継続する。珠洲市の新たな取組の「ちよっこりたすけ隊」に積極的に参加し、活動を支援する	ボランティア活動に参加した延べ人数が全校生徒数を上まわるかどうか A 100%(467人)以上の参加人数 B 90%(420人)以上 C 85%(396人)以上 D 85%(396人)未満	本年度1月末までのボランティア件数は32件で参加した生徒の延べ人数は500人であった。計画していた一人暮らし老人宅を対象にした除雪ボランティアは、積雪が少なかったため実施できなかった。	A	A評価となったが、活動実績のほとんどが、特定の2～3の部によるもので学校全体の活動にはなっていない。全校生徒対象にクリーンビーチに取り組んだり、遠足などを利用しての空き缶・ゴミ拾いをしたりなど、大がかりなボランティアの取り組みが必要である。また地域の要請に応じてボランティアを行う「ちよっこりたすけ隊」への要請がなく、機能しなかった。
	④ 七尾特別支援学校珠洲分校とのコラボによる「珠洲の実商店」の経営実習を行い、両校連携による地域密着型の学校づくりを進める。	生徒自己評価アンケートにおいて、「お互いを認め合い、協力できた」の回答をした割合が A 80%以上 B 65%以上 C 50%以上 D 50%未満	「珠洲の実商店」に関わった生徒に対するアンケート結果では「お互いを認め合い、協力できた」が97%であった。	A	七尾特別支援学校珠洲分校の生徒さんが制作した珠洲焼のマグカップや銘々皿を能登空港開港イベントと一緒に販売実習をしたり、本校生徒がPOPを考案し飯高祭でも販売するなどコラボによる連携型の学校づくりを行った。課題としては、販売実習以外での協働作業があればよい。
学校関係者評価委員の評価	ボランティア活動や「珠洲の実商店」などの活動を通して地域の活性化に協力していることを高く評価する。卒業後も地域に根付く生徒の育成を期待したい。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	今後とも地域の期待に応えられる飯田高校として、さまざまな取組を実践していきたい。特に地域の行事などに対しては、地域の人達とともに活動する機会を増やし、地域に貢献できる人材の育成にも尽力していきたい。				

